

3-03 治療契約を結ぶきっかけとしての箱づくり法 ～ある統合失調症者への介入経験から～

○伊藤 優里(OT)¹⁾, 嶋川 昌典(OT)²⁾

1)公益財団法人 豊郷病院

2)びわこリハビリテーション専門職大学

Key word : 統合失調症, 箱づくり法, 個人作業療法

【はじめに】筆者は経験1年目のセラピストである。精神科の臨床実習では個別介入の重要性は学んだが、入職すると実習時とは異なる状況に戸惑うことが多かった。受け持ち患者の言動に翻弄され、治療契約を結ぶことの難しさを感じていた。そのような中、「箱づくり法」を実施することが治療関係を見直す契機となった。本報告では、そのような経験の一つを紹介し、自身の成長にとっての意味付けを示す。尚、発表に際して、対象者には口頭文面での同意を得ている。

【事例紹介】妄想型統合失調症の20代前半の女性(A氏)。両親、姉、弟、祖父の6大家族。母親の収入によって生計がたてられていた。父親は精神疾患があるようだが未治療、家族内関係も悪い。現病歴は、高校卒業後、就職するが事務職から経理的な仕事が増えたことを契機に不眠が増え、クリニック通院。その後、親族の葬式で興奮・妄想症状により初回の入院となった。約2週間の隔離後、作業療法(以下、OT)開始となり、筆者が担当した。

【作業療法評価と基本方針】OT導入時は他患への話しかけが多く、興味は拡散傾向にあり、妄想発言も見られた。作業は、自分の興味ある活動(手芸)を選択し、我流で取り組み、出来は稚拙であった。暫くは参加の安定化を目的とし、A氏に合わせる形で開始した。安定しだした1ヶ月後、治療契約の為に箱づくり法を実施。表面的なコミュニケーション能力は保たれていたが、箱の作図は見本を利用したものの裁断後に間違いに気付いて再実施したりと可逆的思考や状況対処力の低下が観察された。面接時は作成過程を客観的に捉えられない、質問への回答も的を射ず、まとまりのない言動が観察された。箱づくり法のフィードバックでは、作業遂行上の特徴を共有し、具体的な課題として、構成的作業を行う際に一つずつ工程を筆者と確認すること、過程を振り返ることで自己認識(今後の生活をするに際しても、具体的な計画を立てにくい為、他者

の支援を必要と感じてもらふこと)に繋げることを確認した。A氏は「このような形で自分のことを捉えてくれたことは嬉しい」と話した。

【治療介入】OT評価を基に、作業は「刺し子」を設定した。先ず全体の工程を確認し、完成させる図柄の絵を描いて貰いながら難易度を一緒に検討して決めた。縫っていく工程では、A氏が工程を振り返るきっかけになるように「こうしたら出来るかも?」「こういったやり方もありそうですね」と筆者が意図的に眩き、協業しながら作品を作るように介入した。また、OT終了時に、“上手くできたこと”, “難しかったこと”, “次回の工夫”の3項目の振り返りを実施した。結果、導入時のような我流で進めていくことは減り、作業を確認しながら進めるようになった。「先生のおかげで考えるきっかけが出来ました」と他者の支援によって自分の行動の振り返る契機に繋がる感覚を抱くことになった。

このような介入を実施したが入院後3ヶ月経過したこと、精神症状が安定している理由から退院となった。経済的な問題と通院の距離の問題で退院直後の外来OTは継続できなかったが、本人の意思がある為、現在、調整している。

【まとめ】介入当初は、A氏の言動に合わせてしまい、単なる作業提供者としての介入しかできていなかった。しかし、「箱づくり法」を用いたことにより、A氏の作業特性を把握できただけでなく、本来、作業療法士が何を専門職であるかを自身が再認識できたと考える。治療構造的な視点、クライアントと作業療法士が作業を媒介にし、クライアント自身の特性を知っていくというコミュニケーション過程に気づけたことが、筆者にとって重要な経験であったと考える。